



# 宮城教育大学 附属学校部だより

## THE NEWS OF ASD

附 小学校・附 中学校・附 特別支援学校・附 幼稚園



※ ASDは附属学校部の英字表記であるAffiliated School Divisionを略したものです。

### 持続可能な社会の担い手の育成を目指して

附属幼稚園 教諭(研究主任) 鎌田 陽介

本園では、今年度より「持続可能な社会の担い手を育む環境とその援助～子どもが夢中になって遊ぶ教育課程～」の主題の下、研究に取り組んできました。現在、現代社会の様々な問題を解決するために、ESD(持続可能な社会の創り手を育む教育)の推進が求められています。小学校以降の教育で、身近な問題を自分事として捉え、実感を伴った学習活動へつなげていくために、幼児期において、持続可能な社会の創り手の基盤となる態度や資質・能力を育成する必要があると考え、本主題を設定しました。

今年度は、研究1年目のスタートとして、ESDの視点で日々の保育を捉え直すこと、文献研究や講師の先生をお招きしての研修会など、職員のESDに関する理解を深めることに重点を置いて取り組んできました。その際、日々の保育の中に含まれているESDの要素や内容を見取るために、広島大学附属幼稚園が作成した、「持続可能な社会づくりの構成概念(幼児版)」を活用しました。上記の他にも、今年度の園内研究として様々な取組を行ってきました。その中から二つの取組を紹介します。

一つ目は、ESDの構成概念の視点も取り入れた「ドキュメンテーション」の作成です。遊びの流れの経緯や、子どもの声、心の声、教師の思い、学びなどを端的に記載しました。ドキュメンテーションを作ることで、遊びの流れが整理され、子どもたちの学びをたくさん見取ることができました。また、今後の展開を考える上で、見通しをもつこともできました。

二つ目は、「カンファレンス」です。カンファレンスとは、保育記録やドキュメンテーション、幼児の遊びの様子を撮影した動画などを基に保育を時期や場面で切り取り、評価を行いながらより良い保育について語り合う営みのことです。ESDの要素が含まれる幼児の遊びを多面的に見取り、保育のアイデアを出し合うことで、これまでの保育を振り返ったり、今後の環境構成や援助について考えたりすることができました。

PDCAサイクルを意識しながら様々な取組を行うことで、ESDの視点で日々の保育を捉え直したり、ESDに関する理解を深めたりすることができました。次年度以降は、ESDの構成概念を含む体験を通して身に付けさせたい能力や態度を明らかにし、それらを育成するための教育課程の編成を行いたいと考えています。

持続可能な社会づくりの構成概念(持続可能な社会の担い手に必要な価値観の基盤となる体験)	
自然とのかかわり	人とのかかわり
<b>III. 有限性(なくなる)</b> 「私たちの周りには、全てのものに限りがあり、いつかはなくなって、元には戻らないこと」 ☆食べ残すことなく食べる ☆壊れたものは元に戻らない ☆死んだものは生き返らない ☆当たり前にあるものがないという体験	<b>VI. 責任性(自分のこととして)</b> 「私たちが大事にしたい生活は、生活の中で起こることを一人一人が自分のこととして捉え、よい生活にするためにすべきことを自ら考え行動していくこと」 ☆他人任せにせず、自分のこととして ☆自分から進んでやる ☆自分の責めに責任をもつ ☆みんなにとってよいことを考え、やってみる
<b>II. 相互性・循環性(つながっている)</b> 「私たちの周りには、私も含めて様々なものが関係し合っており、大きなつながりの環の中に私もいること」 ☆環境・自然とつながり ☆栽培活動(種→生長→食べる) ☆植物を食べる(おいしさを覚える) ☆花→実→種→落葉→新芽 ☆生き物(食べる・食べられる関係) ☆季節の巡りの変化を感じる	<b>V. 連携性(力を合わせて)</b> 「私たちが大事にしたい生活は、みんなの力を合わせて協力し合ったり、助け合ったりすることによって成り立つこと」 ☆互いの思いや考えを調整する ☆「一人一人が大切」☆ルールを守る ☆分け合う、譲り合う ☆遊びや生活が豊かになる経験 ☆友達と力を合わせる経験→一人でできないことができる
<b>I. 多様性(いろいろなある)</b> 「私たちの周りにはいろいろなもので満たされており、いろいろなものがあることで豊かに成り立っていること」 ☆いろいろな生き物がある ☆生き物が生きている実感 ☆自然物(味、匂い、色合い、手触りなどの違い) ☆一人一人が違っていることの実感 ☆違いを受け入れる	<b>IV. 公平性(みんな大切)</b> 「私たちが大事にしたい生活は、一人一人が大切にされながら、周りの人を分け隔てなく大切にしようとするによって成り立つこと」 ☆一人一人が大切 ☆ルールを守る ☆分け合う、譲り合う ☆みんなのことが大切 ☆友達の手のひらささを受け入れる
<b>0. 受容性(受け止めている)</b> 「私たちが取り巻く世界は、私の存在を根拠から変え、受け止めていること」 ☆自然に対する愛らしさ、面白さ、美味しさ、不思議さ、愛情 ☆自分もみんなに大事にされ、愛されている	

※参考：広島大学附属幼稚園

子どもの(心の)声

遊びの経緯、教師の思い

安捕り遊び④  
～虫になって遊ぼう～(9～10月)

ほんをよみてかこう

わたしたちはチョウチョ

虫のお家

わたしはみどりいろのはねのチョウをつくりたい!

わたしはがねい!

がんばるはこころいっぱい

☆ 回廊を見ながらどんな虫になりたいかを考え、自分なりのコスチュームを作っていました。(自立心)  
 ☆ 「この虫になりたい」という、自分や友達の違いを互いに受け入れながら遊んでいました。【公平性】

遊びの中での学びや育ちの姿 ( )  
保育者が見取ったESDの構成概念を含む体験【 】

【持続可能な社会づくりの構成概念(幼児版)】

【ドキュメンテーション】

# 学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」の具現化を目指して

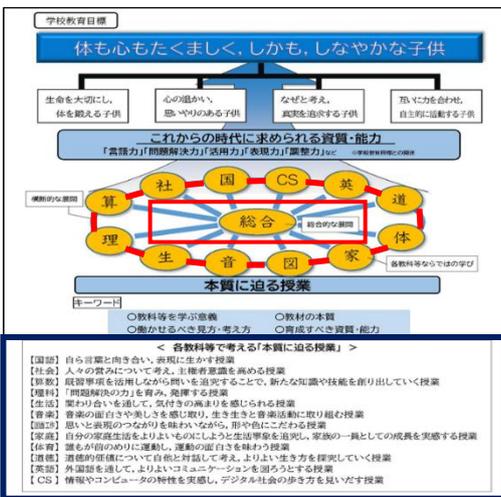
附属小学校 教諭（研究主任） 村上 和司

## I 第3年次（令和4年度）の重点について

授業実践を通して、学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」の具現化のための「本質に迫る授業」を検証していく。

「本質に迫る授業」の検証では、各教科等ならではの学びが中心となる「各教科等で考える「本質に迫る授業」と横断的・総合的な展開の授業実践を通して、子供の具体的な姿でその育成・発揮された姿を見取ってきました。その姿を基にして、資質・能力が育成・発揮された子供の姿が、学校教育目標で目指す子供の姿につながっていくことを検証してきました。

### 第3年次に取り組んできたこと



### 【全校授業研究会を通して】

横断的・総合的な展開による資質・能力が育成・発揮される姿の検証とその手立てのまとめ

- ・全校授業研究会によるチーム提案
- ・資質・能力が発揮される姿が見られたかどうかについて検証

### 「各教科等で考える「本質に迫る授業」の検証とまとめ

- ・部内授業（春、秋）や日々の授業実践における事後の振り返りを通して、検証を行ってきた。（授業検証シートの活用）
- ・第1、2年次の成果と課題も踏まえながら、「各教科等で考える「本質に迫る授業」に必要な手立てを明らかにし、目指す子供の姿へ迫ってきた。

## II 第3年次の成果について

第2年次までの実践を踏まえ、各教科等の特質に応じて、問いを持たせるための働き掛けを行った単元・題材を構成したりすること、十分な教材研究を基に教材の本質を教師自身が捉えておくこと、確かな実態把握を基に子供の思考や学びの文脈を見取りながら学びを展開していくことが欠かせないことを共通理解し、第3年次の実践に取り組んできました。これらの手立てを講じることで、子供が対象への思いや追究への必要感を持ったり、子供の学びに深化が見られたりと、「教科等ならではの学び」を展開する上で成果が見られました。併せて、実践を通して、授業者の意識向上が図られたことや、講じる手立てを教師主体のもの（「～させる」）から子供主体のものにしていくことで、子供主体の学びが展開されていくことも確認できました。



【公開研究会当日の授業の様子】

## III 新しい研究に向けて

今後は「令和の日本型学校教育」の実現を目指して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められています。その基盤となるのは「教科等ならではの学び」です。今後はその授業の在り方について探っていきます。併せて、資質・能力を発揮させる場としての総合的な学習の時間についても、改めて子供の実態を見つめ直し、「目指す探究の姿」の具現化に向けた学びの在り方について検討していく必要があります。本研究の成果と課題を基に研究を進め、新たな学びの姿の構築を目指していききたいと思います。

## 令和4年度の共同研究

附属中学校 教諭（研究主任） 板橋 薫

附属中学校では、令和元年度から共同研究主題を「未来を主体的に生き抜く生徒の育成～新たな価値を見いだす授業づくりを通して～」とし、授業実践に努めてきました。今年度は、公開研究会と年間を通じた校内授業研究会での授業提案の機会を生かしながら、より良い授業の在り方について考えてきました。

11月11日には、昨年度に続きオンラインでの公開研究会を実施しました。8教科の授業を提案するに当たっては、宮城教育大学の先生方に専門的な知見を与えていただくことに加え、4年ぶりに学外からの指導助言者をお招きし、御指導を賜りました。当日は、事前配信した学習指導案と授業映像に基づき、オンラインビデオ会議システムを用いて90分間の授業検討を行い、さまざまな先生方との活発な意見交流を図ることができました。参加申込者については、過去10年間で最も多い人数となりました。初任者研修や中堅研修、各学校の現職研修等、研修の一環としての参加を複数校からいただいたことや、提案授業や検討会を大学講義で活用した例など、幅広い参観者に授業を公開することができたこと、そして京都大学教育学研究科准教授の石井英真先生に御講演をいただき、生徒の姿や私たちの取組を多角的に検証することができたことは、今後さらに私たちの研究活動を発信していくに当たり一層の励みとなりました。

次期教育振興基本計画では、2040年以降の社会を「望む未来を私たち自身で示し、作り上げていくことが求められる時代」と踏まえ、現時点で予測される社会の課題や変化に対応して人材を育成するという視点と、予測できない未来に向けて自らが社会を創り出していくという視点の双方が求められています。子供たちが創造性を発揮して未来を歩めるよう、附属中学校の各授業では、教科の見方や考え方を働かせながら、諸課題の分析や考察を踏まえて新たな考え方を生み出す力の育成やその学習経験の積み重ねを大切にしたいと考え、実践に努めているところです。



【公開研究会当日の分科会運営の様子】



【授業の様子（公開研究会・理科）】

# 個別最適な学びの実現を目指して ～個々の児童生徒の学び方の特徴とは～

附属特別支援学校 教諭（研究主任） 梅津 直哉

本校では、令和3年度より『個別最適な学び』の実現を目指した授業づくりの主題の下、研究に取り組んでいます。1年次の昨年度、本校独自のデータベースに個々の児童生徒の学びの履歴を各教科の視点から蓄積することで、教員間で個々の児童生徒の学習到達度について共通理解を図りながら授業づくりを行いました。

2年次となる今年度は、個々の学びの履歴に加え、個々の学び方の特徴について十分に把握し、授業づくりに生かしていくことを重点目標とし、「学習の個性化シート（以下：GKシート）」を作成することとしました。GKシートを活用することで、すべての学習場を対象として、認知特性や興味関心といった、個々の児童生徒の学習意欲を引き出すことや、学習内容を理解するうえで必要となる情報を整理・分析することを目標としています。GKシートの作成過程では、その子が分かりやすかった学習環境や指導の手立てを日々録のような形で記録を行い、それらのエピソードを参考にしながら「学び方の特徴」を明らかにしていきました。GKシートを基に授業づくりを進めることで、児童生徒が意欲的に学べる学習環境と理解が深まる学習方法を明らかにし、単元や授業づくりを行いました。9月と12月に行った校内授業研究会では、GKシートを基に個に応じた手立てを講じて授業実践を行い、「主体的に学習に取り組む中で経験の拡大を図ることができた」「苦手意識のある活動でも、自分で目標を設定したことで、その達成に向けて前向きに取り組む姿が見られるようになった」といった子供の変容を引き出すことができました。また、教師の変容として、日々録を通して他の教師が記録した個々の児童生徒の成長のエピソードを共有することで、個々の教師が児童生徒に対してどのような視点でそれぞれ指導を行っているかという点について認識を共有することができました。これまでの授業づくりの特徴として、個々の教師の経験則や指導観によって指導の重点が左右される傾向が見られたという課題に対し、日々録の蓄積やGKシートの活用は教師間の認識の一層の共有、同一歩調での指導に一定の効果が得られるものと実感しています。こうしたツールを活用しながら、3年次では、より一人一人が主体的に学びに向かう姿や、授業を通して「できた、わかった」と実感できるような授業実践を行えるよう、さらに研究を進めていきたいと思えます。

【学習の個性化（GK）シート】

## ◎研究授業の様子

### <小学部>



【自分に合った道具を選択する様子】

### <中学部>



【製品作りの工夫を発表する様子】

### <高等部>



【よりよい方法を考え合う様子】